

萩往還

萩往還は、中国山地を横断して日本海側の都市と瀬戸内海側の都市を結ぶ、長州藩の重要な陸路であった。江戸時代（1603～1867）の初めに建設されたこの道は、萩市の中心部から現在の防府市の一部となっている三田尻まで 53km にも及んだ。

この道は、萩城から長州藩を治めていた毛利家によって作られた。萩は日本海側に位置していたため、長州藩の他の地域、特に中国山地の反対側とは比較的隔絶されていた。この問題を解決するために、毛利家は海岸から海岸までの幅 4 メートルの高速道路を建設した。これにより、藩全体の勢力を維持し、瀬戸内海からもアクセス可能な大阪の市場に直接アクセスできるようになった。

宿場や茶屋が点在する萩往還は、明木、佐々並、山口、三田尻の各町を通っていた。江戸に向かう大名毛利家の参勤交代で利用されていた。この道は萩の唐樋の札場の高札から始まっていた。2010 年には、この高札の立派なレプリカが元の場所に設置された。

現在では 26.1km のこの道が復元され、その全体をハイキングすることが可能となっている。山口の手付かずの美しい田園風景の中を歩くことができ、国内外から多くの観光客が訪れている。2007 年には「日本風景街道」に選定された。

明木 Google マップのリンクは[こちら](#)

佐々並 Google マップのリンクは[こちら](#)

夏木原 防長国境 Google マップリンクは[こちら](#)